

序 文

本書は、日常診療で腎生検に関わり、でき上がった腎生検標本を自ら顕微鏡で観察し、診断を考えている医師向けに作成した実践的な腎生検学習書であり、病理診断アトラスとは性格が異なる。初学者向けでもあるが、腎生検に興味のある専門医の先生にも楽しんでいただける書籍ではないかと考えている。

腎生検は、腎疾患の鑑別において極めて重要な診断法である。ただし、単に糸球体腎炎や尿細管間質性腎炎などの腎炎組織型の鑑別診断を行うための手段ではない。加齢、高血圧、肥満、耐糖能異常などにより、腎組織構造は大きな影響を被る。腎生検組織にみられる個々の症例の非腎炎要素の影響も読み取り、腎障害の本質をつかむことが腎生検診断では重要である。

小生らは、腎生検の本質的な読み方が重要であることを、恩師である荒川正昭先生（新潟大学名誉教授）から教わった。「腎生検標本は、患者さんの顔と同様に、一人として同じ所見を呈していない」。この言葉は、荒川先生が繰り返し我々に伝えられた言葉である。そして、今もこの言葉は腎生検標本を前にすると実感する。腎生検の標本には、患者さんの全身的異常が反映される。その所見にどこまで迫ることができるのか。日々の腎生検標本の観察の中で、我々が読み取る鍛錬をしなければならない点である。

本書では、腎生検の実践的学習書として、“腎生検の歴史”、“腎生検標本の作製法、染色法”なども必須の学習内容と考え、網羅している。“腎生検の歴史”については、恩師荒川先生に執筆をお願いし、貴重な原稿をいただいた。また腎生検標本を正しく診断するためには、糸球体病変のみでなく、腎間質、腎内血管病変の読み方を系統的に勉強することが必要である。本書においては、腎臓病理をサブスペシャリティとして活躍されている二人の病理医、岡 一雅先生と原 重雄先生にこの部分の執筆をお願いした。そして、代表的な各種腎炎に関する実践的な標本の読み方は、神戸大学ならびに新潟大学で、小生とともに腎生検標本と格闘してきた仲間に執筆してもらった。あたかも臨床医がスライドガラスに載った標本を、目の前で観察しているがごとく解説を記載してもらった。それが、本書の一番の特徴である。そして、最後に「ケーストレーニング」として、「総論」および「各論」で学んだ腎生検の読み方、それが身についているかどうか腕試ししていただくための症例を用意した。是非チャレンジしてもらいたい。

本書は、腎臓病理を専門とする医師が執筆した書籍ではない。おそらく、病理専門の先生方から見ると、まだまだ未熟で間違いもあると批判を受ける箇所もあるかと思われる。その点は、今後さらに改善していきたいと思っている。ただし、治療を行う臨床家が、腎生検標本の腎炎要素そして非腎炎要素も読み取り、個々の症例に合った有効な治療を考える一助となれば、という思いで編集・執筆にあたったことをお汲み取りいただければと願う次第である。

最後に、本書の企画と制作に多大な援助をいただいた南江堂出版部の諸氏に深い感謝の意を捧げたい。また、自身の勉強も兼ねて丁寧に校閲に力を貸してくれた、長崎大学腎臓内科の北村峰昭氏にも感謝する。

2013年1月

西 慎一